

〈論文〉

『漢城新報』日本語面記事の一考察

伊藤知子

要旨

『漢城新報』は1895年2月から1906年7月まで朝鮮で日本人により発行された新聞である。日朝二言語新聞で、対象とする読者は日本人と朝鮮人の両方であった。紙面構成は1,2面が朝鮮語面、3面が日本語面、4面が日朝二言語の広告面となっている。今まで韓国では朝鮮語面の記事についての研究はいくつかみられるが、日本語面である3面についての研究はされてこなかった。現在のところ日本語面の現存が確認されているのは1895年9月9日から97年2月15日までである。本稿ではこの期間の日本語面の全記事を対象として調査した結果を報告する⁽¹⁾。

キーワード：『漢城新報』、日本語面、朝鮮語面、政治関連記事

はじめに

創刊時に日本外務省の機密費を得た『漢城新報』は、その後も毎月補助金を受けており、外務省の機関紙的な性格をもっていた。そのために論調は政府と一体化し日本の対韓政策と密接な関わりを持っていた。

『漢城新報』の研究は1990年ごろから言論学と新聞学の分野ではじまった。これらの研究は『漢城新報』が「日本の韓国侵略を合理化するための広報機関紙として発刊されたためその内容については批判されて当然」⁽²⁾だという見方が一般的であった。文学の分野で研究が始まったのは1990

年代後半からであるが⁽³⁾、それらは朝鮮語の1,2面と日朝語の4面の広告のみを対象としており、日本語面である3面については研究されてこなかった。その背景には、韓国人研究者にとって当時の日本語表記を解釈することが困難であることと、朝鮮語面記事に比べ日本語面記事への関心が少なかったことが考えられる。そこで本稿では、これまで研究されてこなかった日本語面の記事を整理し、その特徴について考察する。

日本語面記事の分類

まず、日本語面の全ての記事を、以下の表のように11の項目に分類した。

項目	記事数 (比率)	(4)
① 韓国国内記事	255 (4%)	
② 特集	62 (0.9%)	
③ 社告・広告	204 (3%)	
④ 地方通信	193 (3%)	
⑤ 輸出入月表	82 (1.3%)	
⑥ 居留地関連記事	192 (3%)	
韓国政治関連記事	3,152 (50%)	
日本政治関連記事	1,402 (22%)	
海外政治関連記事	519 (8%)	
学校関連記事	167 (2.6%)	
俳壇	76 (1.2%)	

番号がついてない項目の記事は、日本語面と同日の朝鮮語面に朝鮮語で載っているので、ここでは取り上げない。比率を見るとわかるように、それらは主に韓国・日本・海外の政治関連記事であり、全体の80%を占めている。したがって、ここで扱うのは残りの20%ということになる。政

治記事が多いのは『漢城新報』が政治色の濃い新聞であったことを示している。

① 韓国国内記事

韓国国内記事とは韓国の国内で起きた出来事に関する記事である。以下には例として韓国の景気の動向に関する記事を挙げる。

(1)「泥岷の閉店」(前略) 然るに同種の店数は増殖して金融は滞り且つ韓人の購買も近頃著しく減したるより何れの店も不景気を歎ぢ間には大店にして店を閉し資本を負ふて帰国せんとするものあるやに聞けり(中略) 忍耐久しきに持して其信用を得顧客を惹くに至らば相当の収利を見るは照々たるべし唯一時の不景気を以て店を閉さんとするが如きは居留商民の為に深く取らざる所なり⁽⁵⁾

(2)「商店の散在」(前略) 京城中は廣濶の處なれば一處に集りて競争し売崩の不利益を覩るに至らんより各所に散在して大に顧客を引かば其利益は却て多からん支那人の如きは所々に散点して大に営利を計りつつあればこれに少し倣ひては如何と云ふ人あり⁽⁶⁾

(1)泥岷は、当時日本人街があった地名である。商店は一時的な不景気で店をやめるべきではないという内容である。

(2)日本商人は同じ種類の店を連ねて競合するが、それよりも支那人のように離れて店を出すことを考えてはどうかという内容である。

これらの記事は日本商人への注意喚起の意味と、漢城の景気の動向を伝えている記事とも読み取れる。この他に、漢江の洪水、コレラ患者などの災害、伝染病などの記事も見られる。

② 特集

特集とは、ある特定のテーマについて2回以上連載した記事である。

朝鮮沿海各港誌	1985.9/9, 11, 13, 15, 17, 19, 21, 23, 25, 27, 29	(7)
朝鮮第一の米穀輸出港	9/23, 25, 27, 29	
朝鮮雜俎	9/25, 27, 29	
セダン 25 年祭りドイツ皇帝演説	11/19, 21	
在平壤の日本商民	12/23, 25, 27	
支那貨幣制度	1986.2/7, 9, 11, 16, 18, 20, 22	
新式主鑑八島	4/25, 27	
泥岬と南大門	6/30, 7/2	
劉麟錫陳情疏	8/29, 31	
咸鏡道事情一斑（浦監と北関との関係）	9/26, 28, 30	
輸入品特別調査	10/6, 10, 11/3, 10	

「朝鮮沿海各港誌」は前半が現存せず、目にすることができるのは連載11回目からである。これは咸鏡道の各港の情報であり地理、気候、人口、碇泊所、地方物産、附近里数、風俗などが詳しく説明されている。

「朝鮮第一の米穀輸出港」には、従来釜山が唯一の米穀産出地だったのだが、木浦の開港で木浦が朝鮮で最も米穀の輸出の多い港になったこと、海産物も釜山から木浦に中心地が動いたこと、そして日本人が朝鮮沿海での漁業をする際非常に便利になったということが書かれている。

このような商業関連の記事としては他に「在平壤の日本商民」「輸入品特別調査」がある。「在平壤の日本商民」の内容は、日本は日清戦争の勝利で多くの商業的新天地を開拓したのだが、平壤もそのうちの一つであるから、平壤の日本商人の現実を知り、研究してほしいというものである。「輸入品特別調査」は日本商業会議所で調査報告した要領である。営業者らに参考になるようにと書いてある。燐寸・洋傘・紡績糸・陶器・玻璃

器・絹反物・紙・煙草・木材及板・竹材・銅・石炭などそれぞれ3年間の輸入品の種類，産出地，販売価格，需要者の用途，需要者の嗜好，輸入販売の手続き方法，短所と長所，改良すべき部分，需要者の程度と将来の項目などに分かれている。

「支那貨幣制度」では，清日貿易に従事する人が知っておくべき内容を紹介している。「咸鏡道事情一斑」は布衣遊子という筆者によるもので，咸鏡道の港湾，明太，砂金，物価，清の商人，商業，流賊などの紹介ならびに浦鹽斯徳と咸鏡道との関係について書かれている。

この他に興味深い記事としては「朝鮮雜俎」で，「荒誕奇怪の言は朝鮮人の好むで伝ふる處なり乃ち聞くが儘に之れを録す」として慶尚道や咸鏡道の5つの地域の伝説らしきものを紹介している。

その他，「セダン25年祭りドイツ皇帝演説」は1925年の普仏戦争の時のドイツ皇帝の演説した内容である。「新式主鑑八島」は軍艦の大きさと製造過程の説明であり，「泥岷と南大門」は日本人街の道路修理についての内容，「劉麟錫陳情疏」は忠清道の義兵将である劉麟錫による乙未事変，断髮令に対する陳情書の翻訳である。

③ 社告・広告

社告はその名の通り，新聞社から読者へのしらせである。

広告には広告と特別広告の2種類があり，広告は個人の知らせ（火災時に助けてくれた人への感謝の言葉⁽⁸⁾，急用で帰国する知らせ⁽⁹⁾，帰国の挨拶⁽¹⁰⁾など）と，店の広告⁽¹¹⁾として⁽¹²⁾使われた。一方，特別広告は居留民全体の生活の重要な知らせで，大きく4種類に分かれる。

一つ目は京城日本初等学校関連の広告である。内容は初等学校建築寄付金（寄付者の名前と値段）⁽¹³⁾，寄贈（寄贈者の名前と品目）⁽¹⁴⁾，入学希望者の募集⁽¹⁵⁾などである。この初等学校関連広告が最も多く掲載された。

二つ目は居留民総代役場が伝える各種知らせである。居留地商業会議所

の議員の選挙（投票，結果）⁽¹⁶⁾，歸朝と渡韓の申請要請⁽¹⁷⁾，暴民被害申請要請⁽¹⁸⁾，湯屋取締規則，消防組規則などの規則改定の知らせ⁽¹⁹⁾，渡韓禁止緊急勅令⁽²⁰⁾，開城と開城付近の地方行政許可の知らせ⁽²¹⁾ などである。これは当時在京城 1 等領事であった内田定槌という人物から伝達を受け，居留民総代役場が広告を出すという形式になっていた。この特別広告は居留日本人全般に重要な情報といえる。

三つ目は行事の知らせである。天長節や招魂祭などの行事の場所と時間が記されている⁽²²⁾。

四つ目は生活上の知らせである。天然痘の流行により居留民総代役場にて 50 名無料で施術をする⁽²³⁾，夜学会（勉強会）の知らせ⁽²⁴⁾ などである。広告面を上手く活用し，居留民に各種の知らせを伝えていたことがわかる。居留民にとって生活に関する重要な情報であったと思われる。

④ 各地方の通信

日本語面の特徴の一つがこの地方の通信記事である。これには朝鮮国内だけではなく日本の広島も入っている。掲載された記事の数は 193 本であるが一つ一つが他の記事と比べると分量が多く，非常に詳しく書かれている。これは 1896 年 5 月に作成された紙面改良案にそってのことだと思われる。

紙面改良案とは 5 月 29 日に日本公使小村寿太郎が日本外務省宛に送付した「漢城新報改良維持ノ企画」という機密文書のことである。『漢城新報』が創刊されて 1 年しか経たないにも関わらずこのような改良案が提示されたのは 1895 年 10 月の乙未事変に加担した『漢城新報』の主要メンバーに退韓命令が下され，新聞が存続の危機に立たされたためだった。

1895 年 4 月の日清戦争終結後，朝鮮ではロシア軍を背景に閔妃が勢力を増しつつあった。それを恐れた日本は，朝鮮公使の三浦梧崧と『漢城新報』の社長安達謙蔵により計画された乙未事変（閔妃殺害事件）を実行し

た。当初三浦は大院君をかついだ訓練隊のクーデターのように偽装しようと考えていた⁽²⁵⁾。しかし兇行現場にはアメリカ退役将軍ウィリアム・マックタイ・ダイとロシア人技師サバチンが居合わせており、彼らは日本人の犯行を自国の領事らに報告した⁽²⁶⁾。そこで日本政府は列強対策のために事件の真相調査に基づいて関係者を処分するという応急対策を講じ⁽²⁷⁾、乙未事変に加担した『漢城新報』の主要メンバーに退韓命令を下して広島監獄に収監した。こうして新聞は存続の危機に立たされたのである。

改良案に書かれた各地通信に関する記述は以下の通りである。

「各地通信について仁川、釜山、元山、平壤、開城、大邱 各地における種々のできごとを敏活に報道せしめ日、韓二文共これを登載し当邦各地の実情網羅のこすなきなり期す」⁽²⁸⁾

ここには仁川、釜山、元山、平壤、開城、大邱の各地の知らせを伝え、日本語、朝鮮語で掲載し、各地の実情を網羅し記録するとあるが、実際は、仁川、釜山、元山の通信は見られたが、平壤、開城は少なく、大邱は確認できる範囲では一度もなかった⁽²⁹⁾。そして日本語、朝鮮語で載せるようにと書かれていたにも関わらず、各地方の通信は日本語面だけで朝鮮語面には掲載されなかった。通信の内容は商況、主なできごと（行事、行政、暴動、伝染病）人口、戸数などである。『漢城新報』のメンバーが所属する熊本国権党の機関紙『九州日日新聞』には『漢城新報』の記事の一部がそのまま転載されていたが⁽³⁰⁾ この地方通信は朝鮮各地の出来事を一つにまとめて日本に伝える機能を果たしていたとも考えられる。

各地の通信がみられるなか、1895年11月2日から日本の広島からの通信が掲載されはじめた。その内容は乙未事変で退韓命令が下された『漢城新報』のメンバーたちの消息を伝えたものである。

見出しが「広島通信」となっているのは1895年11月2日、5日、9日、

11日の計4回で⁽³¹⁾、その後は見出しが特になくそのまま広島の記事を伝える記事が見られた。なお、同じ内容の記事は朝鮮語面にはみられない⁽³²⁾。

乙未事変関連の広島の記事は以下のような見出しで送られてきた。

広島監獄内の実況	1895.12.7
三浦子以下	12.25
広島 of 現在監者	1896.1.8
広島消息	1.16

12月7日「広島監獄内の実況」はほとんど1段の長い分量で、三浦子爵以下乙未事変関係者の留置されている広島監獄の状態を詳しく伝えている。原文は長文であるが、ここでは箇条書きで紹介する。

- ・監室は独房、広さは畳1枚半ぐらい、洗面所と便所がある。
- ・午前6時30分起床、午後6時30分就寝。
- ・本は3巻までという規則があるが、寛大で何冊でも構わない。毎日看守が来て書信や本などの要請がないか聞いてくれるため相当便宜がはかられている。
- ・毎日運動は15分ずつ、入浴は2日に一回。
- ・食べ物に差し入れが多く望んだものが食べられている。
- ・皆礼儀正しいため、看守の言葉づかいも丁寧である。

この記事の最後の文章が全てを語っている。

「要するに広島監獄署の京城事件被告人に対する取扱ひ振りは至つて鄭重にして諸種の便宜を与へれば入監諸氏の身の上は敢て氣遣ふに及ばざるべしと云ふ」

1896年1月8日「広島現在の監者」では広島監獄に入監している者の名前が表記されている。

「三浦梧樓 杉村濬 岡本柳之助 馬屋原務本 高松鉄太郎 村井右宗 藤戸与三 馬來政輔 鯉登行文 石森吉猶 国友重章 月成光萩原秀次郎 佐々正之 平山岩彦 家入嘉吉 藤勝頭 安達謙蔵 松村龍起 方野猛雄 澤村雅夫 廣田鷹次郎 成相喜四郎 小田俊光 難波春吉 牛島英雄 宮住勇喜 小早川秀雄 吉田友吉 横尾勇太郎 木脇祐則 高橋源治」

このうちの国友重章、佐々正之、平山岩彦、安達謙蔵、牛島英雄、小早川秀雄が『漢城新報』のメンバーである。社長の安達をはじめとして主要メンバーが全員朝鮮を離れたのであるから、新聞が存続の危機に立ったのも当然だった⁽³³⁾。

以上で見たように、地方の通信は各地の実情を伝えるものであり、日本ではこの記事から直接各地の動向を確認していたと考えられる。また『漢城新報』メンバーの広島監獄での消息を伝える広島通信は京城の日本人関係者たちに伝達するためのものであったと推測される。

⑤ 輸出入月表

『漢城新報』の日本語面には、毎月中旬にその前月の京城の輸出入月表が掲載されている。情報の出所は京城商業会議所で、一カ月に多い時は5回、少ない時は2回掲載された。輸出入統計額が掲載され、そのなかで輸入と輸出額そして輸入と輸出額が細別されている。例えば輸入日本産、輸入外国産、仁川輸入日本産、仁川輸入朝鮮産、釜山輸入朝鮮産、輸出朝鮮産などのように記載されている。そして価格や輸出入残額を前年度の同じ月と比較した表、輸出入重要品を前年度の同じ月と対照した表、今月の輸

出入貨物、品目、価格を細別して掲載し、最後に商況という見出しで京城の商況について述べている。またその月の重要行事と気候についても載せている。この統計をみると当時どのような主要輸出品や輸入品があったのか知ることができ、当時の人々の嗜好物もわかる。京城以外では仁川や釜山、平壤の商況も掲載された。

⑥ 居留地関連記事

居留地関連記事とは朝鮮に居留する日本人についての記事である。実際に記事を見るまえに、まず1895年の日本人居留地がどんな様子だったのかを『安達謙蔵自叙伝』⁽³⁴⁾を通して見てみよう。

次の文章は安達謙蔵の妻、雪子が1895年7月から10月までの約4か月間朝鮮に滞在した時の所感録である。居留地について以下のように書いている。

「明治二十八年頃、京城の日本人居留地は、市街の南端南山の麓いたいにて、チンコーカイという名前の町が一筋、それが日本人商店街であった。日本公使館は南山の中部にあり、その辺は和城台と云って公園式の設備があり、種々の興行物などが時々内地より渡り来て賑わっていた。又本願寺別院等もあり、婦人会の催しもあった」⁽³⁵⁾

当時日本人居留地は南山の麓にあり「チンコーカイ」（泥岷）と呼ばれていた。そこには日本の商店街があり、また公園式設備には時々日本から来た興行物を見ることができた。「本願寺別院」では婦人会も開かれたという内容である。

次は『漢城新報』の新聞社の建物についての記述である。

「新聞社の位置は、居留地の西部南山の麓の小高き場所で、公使館と

は七、八丁も離れていたと記憶する。新聞社の建物は、元朝鮮の上流階級の住居と覚しく、門は壮大なる桜門づくり、邸内は七、八百坪もあるかと思われる広壮の建築で、数十の室あり、廊下あり、庭園ありて、新聞社の業務及び、これに携わる幾十の人々、皆この邸内に起居していた。自分らの室は、庭内一段高き所に別棟となり、三室の小部屋があって、一部屋の大きさは畳二枚半敷ほどの、至ってささやかなものであった。』⁽³⁶⁾

新聞社の位置は日本人居留地の西側、南山の麓にあり、公使館まで7、8丁⁽³⁷⁾程度の距離であったという。新聞社の建物は以前安駟寿の住居であった。安駟寿は当時度支部協弁であったが、後に度支部大臣に就任した人物である⁽³⁸⁾。建物は寺社にあるような門、数十個の部屋、廊下、庭園、新聞社で仕事をする数十名がここで起居していたという。大きさは700、800坪程度ということで非常に大きい家であることがわかる。

そしてこの文章には、当時の朝鮮人の生活の様子が垣間見られる。

「初秋ともなれば、空の色すぐれてうつくしく、紺青にすみわたる中を、雁の幾連れかが北韓山のかなたに渡るを見るころ、南山の茸狩が催されるのであった。鮮人は、初茸は採らぬ慣わしとかで其のためにや、南山の松林は到るところ茸の香りが鼻を打ち、傘の如き初茸は忽ち各人の籠にいっぱいになるさま、内地人の夢にも思い及ばぬような、山の幸を満喫するのであった。又このころ、畑のとうがらいもいろいろ採集して、屋上に干してあり、山上より見はるかせば、空の青さと唐辛の紅さと京城の秋を色どる第一の美観であると、感心したことを覚えている。南山にはところどころ清冽の泉わき出て溪の流れをなし、この水は附近いったい住民の飲料水となり、又洗濯の用水ともなっていた。婦人たちは毎朝頭上に洗い物を満載してきて、溪水にひ

たし、棒を以てたたき、洒し是れを附近の芝原などに広げて乾かし、夕刻また頭上に乗せて家路に帰るを慣わしとしている。夏より秋にかけての毎日を、朝鮮婦人の仕事の大部分は、この洗濯にあけくれるのであると聞いた。」⁽³⁹⁾

初秋となれば茸狩りが行われるが、朝鮮人はその年初めて出た茸は採らないという慣例があり、南山の松の一带に茸がある光景は日本人にとって国内で信じられない光景だと述べている。そして唐辛子を屋上で乾かす風景も見られる。そして南山の所々に湧水が出て住民らの飲料水となり洗濯用水ともなるのだが、朝鮮の婦人らは毎朝頭の上に洗濯ものをのせてもってきて水につけて棒でたたいてそばの芝生でそれらを乾かし、夕方とりに来るのが習慣だと述べている。

このような当時の日本人居留地の姿を背景として居留地関連記事を見ていこう。記事を整理して「日本人居留民の生活に密着した記事」「居留日本商人のための情報」「各種統計」「朝鮮紀行、風土等の記事」「日本のその他の記事」の5項目に分けてみた。

a 日本人居留民の生活に密着した記事

節分、端午、盂蘭盆會などの行事開催の知らせ、女性演劇、ジャグラーなどの日本一団の朝鮮公演の知らせ、赤痢、天然痘などの悪疫の注意喚起など生活に必要な消息を伝えている。ここに出てきた盂蘭盆會の場所が前述した本願寺別院で開かれた。そして女性演劇の記事は1896年6月から8月に数回に渡りみられ、ジャグラー一団の公演も8月に3回程度掲載された。この公演場所が和城台であった⁽⁴⁰⁾。

b 居留日本商人のための情報

ここで扱うのは朝鮮に居留する日本人商人へ向けて書かれた記事である。

「海外に於ける日本商民」

（前略）予輩新聞記者の如きも本国内地に在りては施政の主義方針若くは其他の事に就き各々其見る所を異にし反眼仇視必死となりて互ひに相論駁すと雖も其一朝共に海外に出づるに当りては同心協力其論ずる所其報ずる所唯だ其本国及び其同胞の名誉利益を主とせざるべからず是れ何ぞ予輩新聞記者のみに限らん商業家に於ても亦た此くの如くならざるべからず本国に在りては各々其の利を争ひ時に相衝突し相播排し互ひに其勝敗を決することありと雖も其一たび海外に出で共に商業を営むに当りては須らく其見る所を遠大にし務めて同胞相互の衝突を避け依り相援るけ其地に於ける本国商業の拡張を図らざるべからず…予輩は我商が此際此余沢に惰眠せず相依り相援けて益々其歩武を進め以て此地に於る本国商勢の一大伸張を企図せんことを望む⁽⁴¹⁾

「昨今の不景気」

（前略）而して国喪，断髮，地方の不穩は是れ一時の現象に止まり之れより生ぜし商況不景気は遠からずして挽回の期来るべければ吾人は我が商人が昨冬我征清軍の遼東半島に冬籠りせし難苦を思ひ能く其蟠根錯節に堪へ將に來らんとする商勢回復の時機を待たんことを望む⁽⁴²⁾

引用文「海外に於ける日本商民」は日本商人らがより力を合わせ団結しなければならないという趣旨の内容である。引用文「昨今の不景気」の内容は今朝鮮では閔妃の国葬，断髮，暴動など状況が良くないが，少し経てば挽回の機会がおとずれるから日清戦争の時も遼東半島で冬に耐えたことを思い出し商業の勢力が回復する時期を待つようにというものである。これらは新聞記者が直接商人らに訴える口調で書かれているのが特徴である。それほど『漢城新報』が商業にも力を入れているといえる。これにつ

いは『漢城新報』の主要メンバーが所属する熊本国権党について知る必要がある。熊本国権党は国権拡張を一大綱領として活動する政治団体である。『漢城新報』の社長安達謙蔵をはじめとし主筆の国友重章，編集長の小早川秀雄，編集委員の佐々木正などは熊本国権党のメンバーである。熊本国権党の機関紙である『九州日日新聞』には本稿でとりあげる期間に以下のような主張を掲載していた。

1895年4月の日清戦争終結後、『九州日日新聞』は朝鮮の独立扶植は日本の義務であり権利であると主張していた⁽⁴³⁾。7月の朴泳鎬内閣の失敗により閔妃勢力が力を増し、10月に乙未事変が起こり、ロシア勢力の台頭が顕著になっていった。日本政府が日露共同して朝鮮を保護するといういわゆる第二期政略をとっていくことに対し、「協同とは名ばかりでロシアの思うままになる」と抗議をしめし、非常に「遺憾」だと述べている⁽⁴⁴⁾。続く1896年5月1日「形を避けて実を収めよ」では、政治上の事で、勢力争いや衝突を避け、もっぱら社会上の各事業に尽力し、その勢力を朝鮮に植え付けていくべきだと主張している。その後11月に露韓合同条約が締結されると、日本は対韓事業の経営を拡張していくべきであるという内容の記事が掲載された⁽⁴⁵⁾。

このように熊本国権党は本稿での対象期間に朝鮮半島での経済的な勢力拡張に尽力していることがわかる。

そして朝鮮各地の商況を伝える記事も多い。

本稿が調査対象としている期間（1895年～1897年）の不景気の原因は科擧の廃止と断髮令の強行，地方暴動のせい⁽⁴⁶⁾だと推測している記事もある。また日本の木綿が1894年から出現し、95年に進歩して主な輸入国である英国，印度を抜いたこと⁽⁴⁷⁾，日本の粗悪品に注意をする記事⁽⁴⁸⁾などからは，当時の日本木綿が好景気であったことがわかる。

このほか商業に関する同業者が居留地で協力を促す集まりも作っていたことも確認できる。それは商話会⁽⁴⁹⁾，質屋組合⁽⁵⁰⁾，仁川商業会議所⁽⁵¹⁾な

どである。

c 各種統計

各種統計は居留民の戸口数、生死統計、労働者賃金、営業別増減比較表、死亡者病名一覧表などである。これらの記録は当時の記録として貴重な資料であり、上でみた輸出入月表とともに資料価値がある。営業別増減比較表は京城を中心として仁川、釜山の統計もあり、京城の戸口数は統計では各日本の都道府県の区分と士族、平民の各男女数まで記録されている。ここでは今回扱わないが労働者賃金などは当時のどのような職業が一日どのぐらい稼げたのかまた朝鮮語が話せる者、話せない者で等差が生じるなど興味深い内容も含まれている⁽⁵²⁾。

d 朝鮮紀行、風土等の記事

朝鮮紀行、風土等の記事とは紀行文である。

記事としては長い方に属する。これらの記事が見られるのは1896年10月からである。

題目	名前	掲載日時
「朝鮮雑話」(一)		1896.10.6
「唐津県通信」(忠清道)	放浪生	11.22
「地方漫遊談」	放浪生	12.4
「関西紀行」	奨業団員 近藤範治	1897.2.1 2.4 2.6

「朝鮮雑話」は各表題が、虎・熊・鶯・小独立国・日人官女となっている。伝説のようなものを聞いたという形式で掲載されている。この文を日本語面に掲載した理由は何であろうか。

「唐津県通信」と「地方漫遊談」はいずれも放浪生という筆者が書いた

文でこの文の目的は地方の商況視察だと書かれている。各地方の戸数、土人の感情（以前は日本人が泊まろうとすると拒否されたが、最近は少し民心がよくなったなど⁽⁵³⁾）詳しく書かれている。

「関西紀行」は近藤範治と著者名が書かれている。3回に渡り平壤から義州までの紀行文を載せたものである。目的は今旅行する人、内地行商者に参考になればと書いたものと言う。

「朝鮮雑話」以外は商業をする人対象の文であることが確実である。「朝鮮雑話」は朝鮮の伝説でも朝鮮に対する知識を知れば朝鮮人との商売にも役立つと考え掲載したのであろうか。

e 日本のその他の記事

最後に日本国内の消息を伝える、その他の記事のみておく。

大阪の豪商住友家が最高級の下駄を注文した⁽⁵⁴⁾ という記事、札幌の夫婦が今年 68 回目の結婚、離婚を繰り返した⁽⁵⁵⁾ などたいして意味のない記事も掲載された。

そして「三陸海嘯遭難者弔恤金」という題目で日本の三陸地方で起きた地震被害を伝える記事と居留民らの募金状況を伝える記事も掲載された⁽⁵⁶⁾。1896 年 11 月 20 日には日本の全国の戸口数が掲載された。そして日本でかまどが改良され発明されたという記事⁽⁵⁷⁾ と 1897 年 2 月 15 日の「来客新話」は東京から来た知人が新しい故国の消息を持ってきたので読者に伝えるという言葉とともに日本の経済発展、物価騰貴、日本人が一生懸命仕事をする様子、今の内閣が強固である姿などを伝えている。

全体的に見て、居留民に日本の事件を伝える消息は量が少ないことを感じる。先に見たように日本語面の記事の 80% は政治関連記事であり、文化的、社会的な情報がこの新聞には非常に少ないと感じた。

おわりに

『漢城新報』の京城における購読者数は、乙未事変（1895.10.8）前には朝鮮人400名、日本人174名、計574名だったのが、事変後には朝鮮人450名、日本人186名、計636名と増加している。ところが政府の講読禁止措置が取られると朝鮮人100名、日本人180名、計280名と朝鮮人が激減した⁽⁵⁸⁾。これで見ると京城では200人弱の日本人が購読している。『漢城新報』1895年11月2日の記事に1895年9月11日現在の京城および仁川の居留民の数が掲載されている。それによると京城男1,018、女515計1,533、仁川男2,857、女1,517計4,099とある⁽⁵⁹⁾。京城についていえば乙未事変以前は1,533人中、174人つまり一割程度が購読していることになる。この一割の購読者はどういう人たちだったのだろうか。日本語面の80%が政治関連記事であり、また特集でも政治的記事が多かったことから見て日本人購読者は在朝日本人のなかでも知識人ではなかったかと考えられる。この新聞がそもそも外務省の補助を得て創設され、熊本国権党という政治団体の支部的な要素を持ち、乙未事変に主要な社員が参加したことから非常に政治色が濃い新聞であったことは明らかである。

特集や輸出入月表、居留地関連記事において商用的な記事が多く見られた背景にも熊本国権党の存在があった。また各地方の通信には『漢城新報』の主要メンバーの退韓後の様子と無罪放免を知らせる記事が掲載されたことが注目される。

また配達において地方には仁川42部、釜山12部、元山4部、日本各地80部、各地新聞交換40部、計180部が配布された⁽⁶⁰⁾とある。この部数を見ると京城以外では日本へ一番多く送っていることがわかる。日本に動向を伝える機能を果たしている。そして実際に『九州日日新聞』には『漢城新報』の日本語面記事がそのまま一部掲載されていることも確認している。

日本語面が果していた主たる機能の1つは日本に向けて朝鮮の動向を伝えることであり、もう1つは、1,2面の朝鮮語の記事の原文としての機能だったのではないかと思う。

《注》

- (1) 本稿は延世大学博士論文「漢城新報研究」(2020)の一部を日本語にし、修正加筆したものである。
- (2) 鄭晋錫, 『韓国言論史』, 나남出版, 1990, p.150
- (3) 『漢城新報』の文学的研究は以下の通り。

김영민, 『한국의 근대신문과 근대소설 2』, 소명출판, 2008

권영민, 「『한성신보』와 최초의 신문 연재소설」, 『문학사상』, 1997

박수미, 「개화기 신문소설 연구」, 成均館大学博士論文, 2005

설성경, 『신소설연구』, 새문사, 2005

布袋敏博, 「二つの朝鮮語訳「経国美談」について」, 『近代朝鮮文学における日本との関連様相』, 緑蔭書房, 1998

伊藤知子, 「『漢城新報』における日本古典『紀文伝』の受容」『新潟大学東アジア学会』, 2010.3, 第19号

伊藤知子, 「『漢城新報』に掲載された日本小説(『日本名士福富臨淵逸事』)について」, 『国際韓国文学文化学会サイ間SAI』2011.5, 第10号

伊藤知子, 「『漢城新報』に掲載された『拿破崙傳』の原本および『乙未事変』との関わりについて」, 『朝鮮学報』2012.10, 第225輯

조혜란, 「한성신보 소재 < 조부인전 > 연구」, 한국고전문학회, 2014

김준형, 「근대초기신문의야담활용양상과고전소설의변모」, 고소설연구, 2014, 37권
- (4) この表は若干の見落としがあるかもしれない。あくまで全体把握を目的として作成した。
- (5) 『漢城新報』, 1895.9.17
- (6) 『漢城新報』, 1895.10.15
- (7) この他に特集には「朝鮮開国始末」「日清講和 遼東還付始末書」「朝鮮半島の地質大勢」「米国新大統領」の4つの記事があるがこれらは朝鮮語面にも掲載された。
- (8) 『漢城新報』, 1896.4.2
- (9) 『漢城新報』, 1896.4.5
- (10) 『漢城新報』, 1896.5.19

- (11) 『漢城新報』, 1896.4.21, 5.13, 5.19
- (12) 店の広告は4面の広告面に掲載されるのが一般的である。
- (13) 『漢城新報』, 1895.9.17, 10.25, 11.13, 12.1 など。
- (14) 『漢城新報』, 1896.1.24, 2.5, 3.3, 3.21, 3.27, 3.29, 3.31 など。
- (15) 『漢城新報』, 1896.3.27, 3.29, 3.31 など。
- (16) 『漢城新報』, 1895.11.23, 12.1, 1896.1.28 など。
- (17) 『漢城新報』, 1895.10.17
- (18) 『漢城新報』, 1896.3.13
- (19) 『漢城新報』, 1896.3.3.1, 4.2, 4.27 など。
- (20) 『漢城新報』, 1896.5.13
- (21) 『漢城新報』, 1896.5.19
- (22) 『漢城新報』, 1895.10.31, 12.7
- (23) 『漢城新報』, 1895.12.27
- (24) 『漢城新報』, 1896.3.3
- (25) 朴宗根, 『日清戦争と朝鮮』, 青木書店, 1982, p. 249
- (26) 同上, p. 257
- (27) 同上, p. 259
- (28) 金容九, 『韓日外交未刊極秘資料叢書3』, 亜細亜文化社, 1995, p. 81
- (29) 『漢城新報』, 1896.8.19
- (30) 伊藤知子, 拓殖大学『語学研究』, 「『九州日日新聞』の中の朝鮮通信①」, 第142号, 2020.3.25
- (31) ただし11月5日だけ「広島書信」というタイトルになっている。
- (32) ただし1896年1月22日の内容は乙未事変の退韓者全て放免となったという内容であるが, これは朝鮮語面にも掲載された。
- (33) 1896年1月22日に掲載された「三浦子爵以下皆放免」という見出しの記事は朝鮮語面にも掲載された。その内容は以下の通りである。
- 「昨年十月八日王城事変関係嫌疑者を以て広島獄に在りし前任韓公使三浦子爵以下何れも嫌疑不十分にて無罪放免となりし裁き一昨日同地より電報ありたり」
- 乙未事変関連の被告人らが全て放免となったことを知らせるため普段より大きな活字を用いて掲載されている。
- 1月24日から2月9日まで9回連続して「謹告」という見出しで佐々正之本人が掲載した文が日本語で載っている。これは3面ではなく4面の広告面に掲載された。
- 「小生儀是迄入監中之處此度証拠不十分に付晴天白日の身と相成候此段在

京辱知諸君へ謹告す」

今まで入監中であったが、この度証拠不十分で潔白を立証することができ京城にいる皆様に謹告するという内容である。佐々正之以外に『漢城新報』のメンバーも全て放免となったにも拘らず、佐々一人だけが個人の名前でこのように広告面に載せたのは、彼とこの新聞との結びつきが格別に強かったからである（伊藤知子，延世大学博士論文「漢城新報研究」第二章2.「『漢城新報』関連人物とその役割」参照）。

- (34) 安達謙蔵，『安達謙蔵自叙伝』，新樹社，1960，p. 65-67 参照。
- (35) 同上
- (36) 同上
- (37) 丁・町，一町は約 100 メートルとして計算可能。
- (38) 安嗣寿は安国善の叔父で，のちに安国善は彼の養子になっている。波田野節子，『韓国近代作家たちの日本留学』，白帝社，2013，p. 7-9
- (39) 安達謙蔵，同上
- (40) この記事の内容は講演場所，講演題目，観客の反応など書かれている。このうち和城台が出てくる記事は 1896 年 6 月 24 日，8 月 7 日，11 日，19 日の各 3 面である。
- (41) 『漢城新報』，1896.1.18
- (42) 『漢城新報』，1896.1.28
- (43) 『九州日日新聞』，1894 年 5 月 23，24 日「朝鮮論」，5 月 28 日「南北の経営」，6 月 8 日「朝鮮の独立布告」
- (44) 『九州日日新聞』，1896 年 4 月 26 日「朝鮮局面の一変」
- (45) 『九州日日新聞』，1898 年 11 月 8 日「対韓事業発展の機」
- (46) 『漢城新報』，1896.1.28
- (47) 『漢城新報』，1896.5.27
- (48) 『漢城新報』，1896.2.26
- (49) 『漢城新報』，1896.1.18「商話会の創設」
- (50) 『漢城新報』，1896.2.20「質屋組合成る」
- (51) 『漢城新報』，1897.1.24「当国商人会議所を設けんとす」
- (52) 『漢城新報』，1895.11.29
- (53) 『漢城新報』，1896.11.22
- (54) 『漢城新報』，1895.12.13
- (55) 『漢城新報』，1896.1.8
- (56) 『漢城新報』，1896.7.16 7.22
- (57) 『漢城新報』，1896.10.10

- (58) 『駐韓日本公使館記録』, 9, 国史編纂委員会, ソウル, 1988, p.436
- (59) 『漢城新報』, 1895.11.2
- (60) 同上

(原稿受付 2020年10月16日)